

金沢城周辺の水系と水利

正会員 Ph. D 金沢工業大学助教授 中川武夫

工学士 栗本建材 川本憲夫

工学士 京福コンサルタント 古池 久

工学士 三統建設 石田郁喜

Water System and Water Utilization around Kanazawa Castle

by Takeo NAKAGAWA, Norio, KAWAMOTO, Hisashi, KOIKE and Ikuyoshi, ISHIDA

Abstract

This paper is concerned with the water system and water utilization around the Kanazawa castle in Edo era(1603-1867). The water system consists of rivers, moats, and channels. The castle lies between the Asano-river and the Sai-river, where the former is on the north side, whereas the latter on the south side. The castle is surrounded in double by moats, viz., Sōgamae-bori, from the east and west sides. There are four smaller moats inside Sōgamae-bori, and eight channels outside it.

In addition to the military purpose, it is realized that the water in Kanazawa has been used for drink, fire fighting, snow melting and clearing, irrigation, garbage dump, sewerage, brewage, paper making, enjoyment and dyeing.

It is concluded that the wide variety water usages in Kanazawa have been made possible by the high quality water in large amount and intelligent persons who could develop new ways of the water usage skillfully. It is suggested that the possible interaction of these persons and the clean water running in the system has enhanced the birth of artistic handicrafts and philosophies, representing our society.

This study may uncover some useful knowledges buried for a long time concerning water resources, disaster prevention, construction and environmental problems.

1 緒言

1)

金沢城周辺の水系は図-1から明らかなように、城をそれぞれ東西からはさむ浅野川、犀川及び城下さくもの渠状に形どる堀・用水群から成り立っている。

金沢の水系の整備がはじめられたのは天正年間（1573～1591）からでその最初は大野庄用水の建設である。1599（慶長4）年には東西の内総構堀（うちそうがほり）1611（慶長16）年には外総構堀（そとそうがほり）をそれぞれ造っている（兼六園全史）。ただし、建設当初にはこれらの堀の中への通水は未だされていなかったようである。

金沢が本格的な城下町へと移行し初めたのは1583（天正11）年における初代藩主前田利家の入城からで三代藩主利常の治下である寛永期（1624～1633年）にはほぼその完成をみた。なお、この時期は幕府が一国一城令を出したことがその契機となり、全国の大名がそれぞれの城を守るための町づくりを積極的に行った時期にちょうどあたっている（金沢の水³⁾17）。

浅野川と犀川は古くはともに大きな河原を有していたが、元和年間（1615～1623）に行われた本

格的な護岸工事の結果、現在ある両川の原型ができたとされている。⁴⁾富田景周の記した蓮池考⁵⁾によれば辰巳用水が1632（寛永9）年に完成し、この直後にそれまで空堀であった蓮池（百聞堀^{いもりぼり}）蜘蛛堀、しらとりぼり、白鳥堀及び大手堀の中へ水が満されたという。ついで、正保年間（1644～1647）に鞍月用水が完成したことで金沢城周辺の主要な水系の整備がほぼ完了した。なお、この鞍月用水は堅町の油屋源兵衛が油を製造するのに水車を回す必要があり、私財を投じて作ったと伝えられている。前出の用水の他にも、城下を流れる用水には泉、中村・高島、長坂小橋、中島用水があった。

本論文では、第2章において、まず、藩政期における金沢城周辺の水系を河川、堀、用水ごとに分けてこれを明らかにする。続いて第3章においては、この水系を流れる水の利用法について論述する。本論文の主な目的は、この水系と水利に関する考察を通じて、今日的課題である水道源、防災、環境問題等に関する新たな知見を得ることにある。

2 水系

本章では、金沢城周辺の水系を河川、堀、用水に

分けて、これを概観する。

(1) 河川

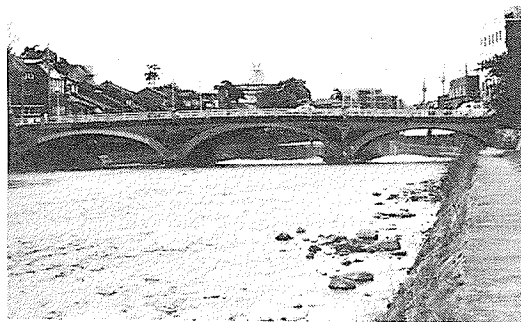
a) 浅野川

浅野川は（写真－1）石川・富山の両県境にある高尾山（標高841m）から医王山（標高989m）の山々の水を集めて流れる。主流は高尾山の北へ大きく削り込む河内谷だが、これと並行する白見谷、及び医王山の山肌に谷を刻む板ヶ谷と菱池谷の四つの支流が湯涌芝原付近で集まり、その後は犀川とはほぼ平行に北西に向って街地を貫流して河北潟に注ぐ全長約3.25kmの川である。現在では、金沢の中心地は香林坊から片町へとだんだん南方へ移行しつつあるが、藩政期以前は犀川が荒れ川だったために街の中心は浅野川口にあった。

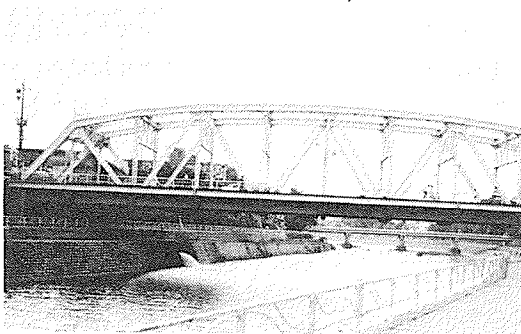
b) 犀川

犀川は石川・富山両県境にある奈良岳の北西斜面をその水源とし、浅野川とはほぼ平行に北西へ向って現在の金沢市街中心地をつき抜けて日本海に注ぐ全長約40kmの川である。犀川の源流は水源から犀川ダムまでの約7kmで、二叉川と呼ばれている。この地域には現在でもほとんど人が踏み込まないので水がきれいながその特徴である。犀川には大きな支流が二つある。そのうちのひとつ内川は標高800m付近に源を発し、山間部を流れ米町で犀川に合流する。もう一つの支流、伏見川は富樫山地の標高300m付近をその水源として流路の大部分は犀川西の平野部にある（写真－2）。

犀川は昔「大川二筋に成て、一筋今の香林坊際の小橋の下流る。深きに依りて舟なども入也。」とあるように朱免野村地内で本流と主流とに分かれ、下流で再び合した。この本流と支流で囲まれた区域には、当時木倉町や寺町があった。金沢の市街地の中で「金沢の町狭きにより御広げ被成とて才川の上を堀で一瀬に被成」するために、元和年間（1615～1623）犀川河原の開拓が坂井就安を奉行としてなされた。工事の内容は本流と支流とを一本化するために小立野及び法島村内の土取場から土を運び河原、瀬、淵を埋めるというものであった。この際、支流の一部は鞍月用水として残しこれを西外総構堀に連ね堀を兼ねることで空堀を水堀とする一方で村井、長両氏の屋敷の間以後は再び用水として流下せしめた。この結果、「俣川あせたり、総て中島



写真－1 浅野川大橋下流から上流を望む
（撮影：小池、1983.1.15）



写真－2 犀川大橋下流から上流を望む
（撮影：小池、1983.1.15）

町家に被仰付、今の河原町是也。」とあるごとく、犀川の旧河原には片町、河原町、川南町、堅町などが新たに造成された。

(2) 堀

a) 総構堀

内総構堀は東内堀と西内堀とに分かれたいた。東内堀は兼六園東の小尻谷町から浅野川左岸の橋場町に到る長さ約1.3km、幅0.8～1.8mの堀であり、西内堀は尾山神社横の西町で城内の水を受けて、浅野川左岸、主計町に到る長さ約1.6km、副0.6～1.8mの堀である。内総構堀はいわゆる「慶長の危機」に際し、二代藩主利長が万一の場合に予想された徳川氏からの攻撃に対処するために客将・高山右近に命じてわずか27日間でこれを完成せしめたと伝えられている。

外総構堀は三代藩主利常により造られ、東外堀と西外堀とに分かれていた。東外堀は東内堀を遠巻きにするように材木町筋に沿って浅野川左岸に至る長さ約1.4km、幅1.8～4.5mの堀である。一方、西外堀は広坂通りの南、本多氏下屋敷から油車町を経て香林坊、長町を通って村井、長両氏の屋敷の間に

にある四つ屋橋まで鞍月用水と水路を共有し、以後は西内堀を遠巻きにするように鍛治片原町かじかたはらまちを経て浅野川左岸いわねらよう ひこさちよう、岩根町と彦三町との境界に至る水路と、本多氏屋敷西から香林坊において鞍月用水と合流するまでの短い水路とがあって、その全長は約3.0 km 幅1.5～3.7 mである。

なお、これらの総構堀は土をその内側に6～9 mの高さに盛りあげて土居とし、土居の上にはさらに雑木、竹などを植え、城の防備の用に供した。

(3) 用水

a) 大野 (庄) 用水

犀川大橋のすぐ下流、かつ右岸、川南町と伝馬町かわみなみまち てんままちの間にある犀川から取水する水路を大野用水といい、前田利長の家臣富永佐太郎によって造くられたといわれている。大野用水の主水路は犀川右岸の取水口から北方ながとまちへ長門町ながまち、長町ながまち、勝尾町かつおまち、古道町ふるみちまちなどを通る長さ約2.2 km、幅6.0 m程度の水路である。このほか、塩川町から宝船寺町しおかわらよう ほうせんじまち、元車町もとぐるままちなどを経て戸板村こいたむらへ入る長さ約2.2 kmの分水路、そして三社五十人町さんじやごじゆうにんまちから山田町へ入り、戸板村に到る約0.6 kmの分水路等がある。大野用水の流過地域の90%以上が武家居住地であるのがその特徴である(写真-3)。

b) 辰巳用水

辰巳用水は小松の町人・板屋兵四郎らにより、わずか一年足らずで完成させられたと伝えられている。辰巳用水(写真-4)の主水路は城から南へ約10 km離れた犀川上流上辰巳村東岩から取水し、犀川右岸に沿う長さ約2.7 kmの水トンネルを経て小立野台うえのはんまち いしひさちよう地へ流れ込んだのち、上野本町、石引町を通り兼六園に到るもので全長約7.8 km、幅1.2～2.1 mである。辰巳用水は兼六園内で大きく二分された。一方の分流は伏越ふせじしの理(逆サイフォンの原理)によっていったん蓮池の下をくぐり、城内へ導かれた。もう一方の分流は再び兼六園を抜け出て、東内堀内へ流れ込んだ。辰巳用水にはこの他にも天徳院前の小立野新町から終余曲折ののち鞍月用水に合流する長さ約1.8 km、幅0.9～5.1 mの分水路、鶴間町からつるままちによらいしきようおうじきようおうじ、経王寺土取場を通り抜け、百々女木町どどめきまちを経て東外堀へ流れ込む長さ約1.7 km、幅1.2～1.5 mの分水路がある。

c) 鞍月用水

鞍月用水の主水路は城の南、上菊橋上流にある平

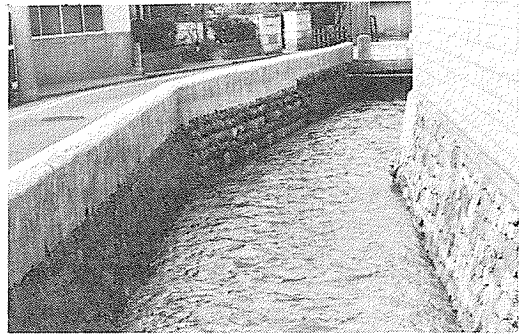


写真-3 大野用水-長町四の橋付近
(撮影：小池、1983.1.15)

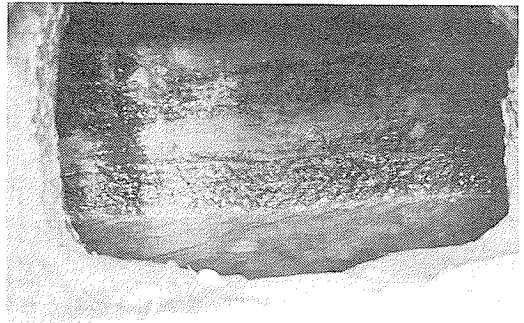


写真-4 辰巳用水-取水口付近横穴から内部を望む
(撮影：小池、1983.1.15)

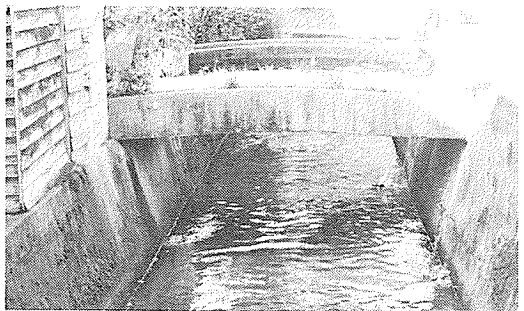


写真-5 鞍月用水-淡木町おかし橋付近
(撮影：小池、1983.1.15)

のまちかへかわさしまち野町と角場川岸町の境付近から犀川の水を取ります。北へ流れ、主馬町しゆめまち、百姓町ひやくしやうを経て鱒町うろこまち付近で西外堀と合わさる。さらに、油車町、柿木畠、香林坊、長町を経て村井・長両氏の屋敷の間にある四つ屋橋から西へ折れ、最終的に大野用水に合流するもので、その長さは約3.6 km、幅1.5～6.4 mであった。鞍月用水もまた多くの分水路をもっていた。村井氏屋敷前やすえらようから西外堀としてそのまま北東へ向い安江町、東末寺を経て浅野川に至る分水路がある。この分水路はさらに東末寺裏から笠市町かさいちまちを経て浅野川に至る水路に分流する。この他にも、村井氏屋敷前から西

北東へ向い英町を通過する分水路とはぼ北へ向い六
枚町に至る分水路がある。鞍月用水も大野用水と同
様にその流過地域の90%以上が武家居住地であっ
た(写真-5)。

d) 泉用水

泉用水は神明宮の裏で犀川の水を取り込む水路幅
約1.5mの用水で、石坂町で西流し、増泉村に至る
長さ約0.5kmの水路と、石坂町で南西に向う長さ約
0.4kmの水路とがある。

e) 中村高島用水

本用水の名前はもとの中村用水と高島用水の二つ
を合せてつけられた。中村用水は犀川左岸の五十人
町内から、高島用水は千日町と西側町との境付近か
らそれぞれ犀川の水を取り、最終的に中村へ至る。

f) 長坂用水

長坂用水は省谷川と称され、犀川の上流にある内
川村から取水し、北西に流れ六斗林を経てカクバに
至り、ここから南西に流れ泉新町、有松に至る。

g) 小橋用水

この用水は浅野川右岸から取水し、北流する。

h) 中島用水

中島用水は岩根町の対岸にある取水口から浅野川
の水を引き北西に向って流れ小坂村に至る。

3. 水 利

江戸の玉川上水や赤穂水道に代表される藩政期に
他藩において造られた用水の用途が多くの場合に飲
料とかがいのための水を確保することに限定され
ていたのに対して、加賀藩において用水または河川
等の水がとくに多くの目的のために用いられていた
ことは興味深いことである。本章では、加賀藩の水
の主な利用法を列挙し、それぞれについて個別に考
察を加える。

(1) 軍事用

浅野川と犀川は戦路上からは金沢城の堀の役割を
果していた。したがって、金沢城は東西方向からの
攻撃に対しては極めて強固であった反面、南北方向
からのそれに対しては比較的弱いのが特徴であった。
この欠点を補うために総構堀が建設されたことは明
らかである。

寛永時代は幕府の支配体制が確立した時期であり、
武家諸法度を破った多くの藩がお家断絶の憂き日に

あった頃でもある。加賀藩においても1631(寛
永8)年に「詰問三か条事件」⁶⁾がもちあがった。し
かしながら加賀藩はこの危機を幕府に対する完全服
従により切り抜けた。ところが一方で、加賀藩は同
じ年に発生した法船寺大火を理由に幕府に城内外の
防火対策に関する計画書を提出しこの許可を取りつ
けた。表向きは防火対策の名目でこの許可を取って
いるが、その計画書の内容は単なる防火対策の規模
をはるかに上まわるものであった。辰巳用水の着工
が法船寺大火の翌年1932(寛永9)年に当たり
幕府から「詰問三か条」により政治的圧力を受けた
ばかりの時期に莫大なスケールの用水普請を四度飯
の実貫工事で完成したことになる。お家断絶の危険
をも顧みず辰巳用水の普請を敢行せざるを得なか
った最大の理由の一つに予測された徳川氏による武
力攻撃に対する金沢城の防備体制の強化をあげるの
が妥当であろう。また一方、城の南にある小立野台
地からの防衛力を強化するために大野、鞍月の兩用
水が建設されたと考えるべきである。

(2) 飲料水

辰巳用水の水が城内へ引かれる以前は城内で用い
られる飲料水は井戸からくみ上げられていた。とこ
ろが蓮池を堀ったことにより城と小立野台地をつな
いでいた地下水路がしゃ断されたため、城内の飲料
水の需要に追いつけなくなった。⁹⁾このため、三代藩
主利常は戦略的意味もあって用水を堀って秘密のう
ちに城内へ水を引くことを考えたのが辰巳用水の建
設計画にはかならない。

辰巳用水の水に限らず、浅野川、犀川そして各用
水等を流れる水もまた、城下に住む人々の飲料のた
めにも大いに用いられていた。

(3) 防火用

金沢は昔から、非常に火災の多いところであった。
たとえば1602(慶長7)年には落雷により城の
天守閣が焼け、烈風のため大台所に延焼し、本丸の
諸建築も全焼している。⁹⁾また、法船寺大火の時には
法船寺の門前町から火の手があがり、烈風のために
この火勢が拡大し、河原町、堅町から仙石町一帯を
焼き尽くしたうえに城内本丸の建物なども焼失した
と伝えられている。この法船寺大火と1635(寛
永12)年の大火をきっかけに三代藩主利常は徹底
的な城下の街区整理に加えて、防火施設の整備及び

消火力の強化を計った。

辰巳用水の着工が法船寺大火を理由に幕府に域内外の防火対策に関する計画書提出直後であることから辰巳用水建設目的の一つに少くとも防火用が含まれていたと考えるべきである。ところで、藩主の火災に対する第一義的関心はその居城及び家臣団の屋敷の焼失をいかに防ぐかにあった。城は防火用水の充足と総構堀の完成による城下からの延焼のシャ断により火災に対する安全度を著しく増した。大野用水と鞍月用水はもとより辰巳用水の水路も武家屋敷区画をお互いに隔離するように配置されたために火災が起った場合にもその延焼範囲を極限する効果があった。また、小橋用水は卯辰山山ろくから小川町を流過する大宮川及び浅野川の三者により武家居住地を囲むことによって、小民家群から成り立つ大衆免地帯、水車町からの延焼を防ぐのに効果があった。

(4) 融・排雪用

北陸の雪は交通の便を悪くしたのみならず、時には家屋を破壊し、人畜を殺傷し、そして城下を密閉した。降雪があった場合には城内はもちろん、各城門に面した道路、武家居住地域、北陸街道など主要な軍用道路は可能な限り除雪された。そして、除雪された雪はたいていは堀、河川または用水の中へ捨てられ処理された。ただし、城下町形成初期には堀、用水は軍事用としての役割がより重視されていたために、これらを融・排雪に用いることに対しては厳しい制限が加えられた。当時の記録によれば、「雪は堀いっぱい捨てるな。」とか「春には日を決めて底ざらえをしる。」等の細かい指示がされていた。しかしながら、時代が下り外敵に対する不安が減少する一方、城下に住む人々の生活が安定し経済活動が盛んになるにつれて、堀・用水等を融排雪に用いることに対する制限が徐々に緩和されてきた。

(5) かんがい用

藩政期に田園部を流れていた泉、中村・高島、長坂、中島の各用水は主としてかんがいのために用いられていた。

辰巳用水は表て向きには城内の用のほかはその分水をいっさい認めなかったとされているが、例外的にこの分水を認めた例が散見される。すなわち、1621（文政4）年加賀地方に大干害があったときに農民のために辰巳用水の水を分け与えたと伝え

られている。¹⁰⁾ また、三壺問書に「^{みつばききき}小立野並に下段の荒地其の時より田地に成る。栗の木林、七ッ屋村、上笠舞の田地是より初る。」とあるように三代藩主利常の治下に小立野台地及びその下にひろがる河岸段丘地を辰巳用水を分水することにより開拓していることがわかる。

また、城下主要部の武家居住地域を流れる大野、鞍月、小橋の各用水の水も、城下において初期の目的を果たしたのは郡村へ導かれ、かんがい用としても大いに活用された。

(6) 塵介処理用

浅野川と犀川はいずれも川幅が広く、水深もあり、その上急流であったため古くから塵介類の格好の棄て場所であった。¹²⁾ 堀、用水もまた塵介処理のために広く用いられていたといわれる。中でも、大野、鞍月、辰巳、小橋の各用水が流れる武家居住地域においては藩政期に塵溜のような塵の一時集積用の入れ物を用いて、各屋敷から出る塵を集積し焼却等でこれを処理したという形跡はなく、塵は屋敷単位でその付近を流れる用水に捨て処分されていたようである。

(7) 下水用

城下に建てられていた家屋は通常その周囲を取り巻く下水溝によって隣家と区切られていた。したがって、各家から出る生活排水は全てこの下水溝に入った人入ったのち、これと隣接する河川、用水内へ放出された。

(8) 醸造用

^{かかぬくにさくざけこう}加賀国菊酒考によると、^{きくすいかわ}犀川は昔は菊水川とよばれ、川に面して菊川町という町名があったこと、岡作という酒屋では菊一が、今村屋では菊水が醸造されていたということである。すなわち、犀川に面する地域では古くから酒造りが行われていたことがわかる。現在、金沢の銘酒といわれる福正宗、日栄もかつては犀川の寒水をくんで醸造されていたといわれる。

(9) 和紙用

北陸は和紙製造では先進地で、その歴史は737（天平9）年の正倉院文書内に「^{えつれいし}越経紙¹⁴⁾」の文字が見られるくらい古い。しかしながら、実際に和紙の生産が盛んになったのは藩政期に入ってからのこと。^{ふたまたむら}二俣村において藩の保護のもと加賀奉書、加州大

すぎはら 杉原などの高級公用紙の紙漉きが行われた。この伝統を受け継ぎ今でも由緒ある二俣和紙^{ふたまたわし}が作り続けられている。こうした和紙製造の「水漬け」「水さらし」工程などにおいて大量の水が必要とされるわけであるが、その質の高さも同時に要求された。

00 観賞用

兼六園は宏大、幽遠、人力、蒼古、水泉、眺望の六勝兼備の名園であるが、この庭園の出現を可能にした最重要構成要素の中の一つに辰巳用水から園内に引き込まれた清流があることを忘れるわけにはいかない。この清流は園内をくまなくかけめぐる曲水^{かすみ}（写真－6）と呼ばれる水路、霞ヶ池などいくつかの池の水を潤しているのみならず、日本最古の噴水（写真－7）にも用いられ園内の美観をいやがうえにも高めている。また、旧城内二の丸にある尾山神社・神苑及び堀の水は言うに及ばず、城下の川、用水内を流れる水もその清澄さゆえに人々の目を楽しませてくれる対象となった。後年、金沢が水都と呼ばれる基礎が藩政期の城下形成期に押し進められた城周辺の水系の整備により築かれたわけである。

01 染色用

加賀友禪は京友禪や沖縄の紅型などと並び日本の染色工芸を代表する質の高さを誇っている。ところが友禪を染める際に手描き友禪^{てがき ゆうぜん}、型友禪^{かた ゆうぜん}を問わず流水で糊や余分の染料をすすぎ洗ういわゆる「友禪流し」（写真－8）の工程があり、この工程で多量の水を必要とする。さらには、この水は特に良質であることが要求され、全くの硬水よりもやや軟水の方が良いとされている。

浅野川と犀川の水量は多からず、少なからず年中良く流れ、かつ深瀬と浅瀬が交互に変化しているので友禪流しに適した流れを場所を適当に選択することによって得ることが可能であった。

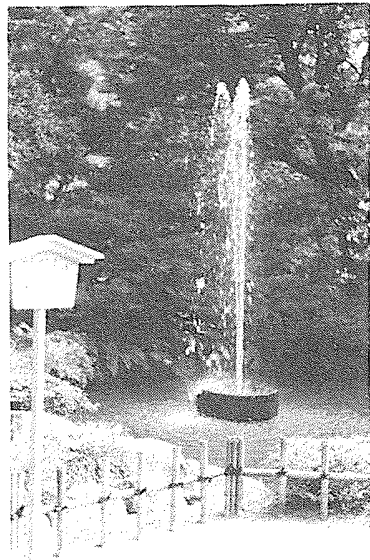
金沢において、加賀友禪のほかにも加賀小紋^{かがこもん}など多くの種類の染色業が発達した理由の一つに豊富でかつ良質の水が身近に得られたことをあげることができよう。

4. おわりに

前章までで明らかにされたように加賀藩においてとくに水が有効に用いられてきた主な理由として、その水系によって運ばれてきた清澄かつ良質の水が多量にあったことに加えて、この水を十二分に活用しうる資質を備えた人材に恵まれていたことをあげ



写真－6 兼六園曲水
（撮影：中川、1982.7.14）



写真－7 日本最古の噴水－兼六園内、霞ヶ池の水面落差を利用した逆サイフォン噴水
（撮影：中川、1982.7.14）

ることができよう。城周辺の水系の整備と水利法の開発の際にこれらの人々によって提示された構想の雄大さ、新奇さそして密さに新鮮なものを感じるのには著者らのみではないはずである。加賀藩における水利法は徹底した実用主義に立脚しながら、その反面で可能な限り水そのものの持つ素材の良さを追求したところに大きな特色がある。このような水に



写真-8 友禅流し-浅野川中流
(撮影：小池、1983.1.15)

対するアプローチの方法がさらに漸進かつ有用な水利法を醸成したのみならず、加賀藩の知識人が水の美を追求するうえに必要な基盤をはぐくむことをも助長した。すなわち、こうした美しい水と知識人との深いかかわり合いを通じてはじめて、古来わが国を代表する芸術作品の多くが金沢の地において生まれることが可能となったのである。

藩政期に行われた金沢城周辺の水系の整備法は以下に述べるような意味合いにおいて防災工学と施行学との接点を有していると見ることもできるよう。すなわち、現在わが国で考えられているような火災洪水等の災害から人間の生命及び財産を守るという防災工学の範囲を越えて、外敵の攻撃すなわち防衛をも考慮して水系の整備がなされたことは現在比較的あいまいに考えられている防災工学の範囲を考える上で興味深い。また、この水系の整備に伴って破壊を余儀なくされた環境の再生と創造が合理的に考慮されながら工事の施行が行われたことは環境施行学の観点から注目に値しよう。

「うしろの犀川は水の美しい、東京の隅田川ほどの幅のある川であった。．．．瀬はたえずざあざあーと流れて、美しい瀬波の高まりを私達釣人の目に注がす。」この引用文は金沢が生んだ文豪宝生犀星が1919（大正8）年8月に発表した小説「幼年時代」の中の一節である。ここで、とくに興味深いのは、犀星によって描写された当時の犀川の光景が今でもその跡を留めていることである。ひるがえっ

て、現在、他の大都市域にある多くの河川が汚染のために死滅の危機に直面している事実を思い起こすとき、開発に伴う環境上の適切な考慮がいかにわれわれにとって大切な使命であるかを教えてくれる。

美しい川のはとりに文明は栄え、その川が死滅するときに、その文明もまた死滅するというのが著者の文明興亡に対する考え方である。この観点からも、美しい水の再生のためにも一層の努力が払われなければならない。

5. 参考文献

- 1) 田中喜男、「城下町金沢-封建制下の都市計画と町人社会」日本書院、pp. 296-297、1969（昭和44）年6月
- 2) 「兼六園全史」兼六園全史編集委員会、p.125、1976（昭和51）年12月
- 3) 「金沢の水17」北国新聞、1969（昭和44）年6月27日掲載
- 4) 田中喜男、「加賀藩における都市の研究」文一総合出版、p. 46、1978（昭和53）年3月
- 5) 富田景周、「蓮池考」、石川県図書館協会、p.315、1938（昭和13）年5月復刻
- 6) 中井安治、「加賀藩秘史 辰巳用水」北国出版社、pp. 54-62、1980（昭和55）年5月
- 7) 神吉和夫、江戸時代の上水道についての2、3の考察、第2回日本土木史研究発表会論文集、土木学会日本土木史研究委員会、pp. 177-180、1982（昭和57）年6月
- 8) 「金沢の水15」北国新聞、1969（昭和44）年6月25日掲載
- 9) 喜内 敏、辰巳用水考、土木学会誌、63巻、土木学会、pp. 53-59、1978（昭和53）年2月
- 10) 「金沢の水19」北国新聞、1969（昭和44）年7月2日掲載
- 11) 山田四郎右衛門、「三壺問書」石川県図書館協会、p. 217、1972（昭和47）年3月復刻
- 12) 山崎達雄、古都における塵芥処理のあゆみ、第2回日本土木史研究発表会論文集、土木学会日本土木史研究委員会、pp. 193-198、1982（昭和57）年6月
- 13) 富田景周、「加賀国菊酒考」、石川県図書館協会、pp. 326-334、1938（昭和13）年5月復刻
- 14) 「越経紙」、正倉院文書、737（天平元）年

[illegible]

図-1 金沢城下図(田中喜男、「城下町金沢」1969(昭和44)年6月の原図に修正・加筆)

刊
口
一
外

武家居住地(固)は相地
 本町・地(町)
 文政より前、城下に編
 入された相持地
 等々地
 河、城、川水
 道路
 城下内にあるのは、從
 主1、明治末頃の地図(年不明)により、石村

1. 城下内にあるのは道
明治末期の地図(年号不明)により石
川順立中央図書館蔵米地図(年号
不明)と訂正して複製。
2. 地図中の人名は屋敷の所在を示し、
人名の下に(下)と付してゐるのは同
人の下屋敷をさす。
3. ヤマとあるのは萩の瓦生地あるいは
荒地をさす。